
IS (インフィニット・ストラトス) 舞い踊る鴉

黒羊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス

IS

舞い踊る鴉

【Nコード】

N2805BA

【作者名】

黒羊

【あらすじ】

女性にしか動かす事の出来ない世界最強の兵器、

インフィニット・ストラトス
IS。

この物語は女性にしか動かせないISを動かしてしまつとある男子二人の物語である。

入学おめでとうございます(前書き)

注意点

- ・ 作者は原作知らず。
- ・ 展開はアニメメイン
- ・ 情報はウィキ&他の二次
- ・ 空白が多いのは携帯画面を考慮して
- ・ パソコンに慣れる練習でもあるので更新遅いです
- ・ これは一度とある別サイトで書いたものです

入学おめでとうございます

馬鹿でかい門。馬鹿でかい施設。

「つつか本当に馬鹿じゃねえのか？」

IS学園。この学園の説明をする前に、まずこの学園を呆けた顔で眺めている少年の、ここに至るまでの生い立ちなどを語らせてもらいたい。

少年は自宅前で数枚の紙を眺めていた。

いや、もう少し正確に伝えよう。

少年は自宅である平凡な二階建てアパート、その個別ポストの前で、自宅のポストに投函されていた複数の紙を眺めて固まっていた。

彼は生まれて間もなく親に捨てられてしまい、元々は孤児院暮らしだった。しかしある日、孤児院を訪れたとある人物と運命的な出会いを果たす。

その人物の名は篠ノ之 束。

当時幼かった彼が知る由もないが、彼女が世界にとってどういう人物であったのか。それは後々知ることとなる。

ただ当時少年は漠然と『変な人だな』と思った。あながち間違っていない。

束との数年の生活を経て、少年は中学二年生の辺りで彼女のもとを離れている。

別に出てけと言われたわけではない。むしろ束の方が泣いてしまっている。ついてきたものだった。

かといって、少年に理由があったわけではない。

ただなんとなく、もう一人でもやっていけると確信がもてたからなのか。

衣食住に加えて、束には学校まで通わせてもらっていたのだ。

遠慮の一つもさすがに生まれようというものだった。

どちらかといえば、少年的に自分が去った後の彼女の生活スキルの方が心配だった。

別れの日、彼女はいつものふざけた調子で『悲しいよー』とか言っていたが、それでも最後には笑って見送ってくれた。

それはやっぱり嬉しかった。

彼女は最後の贈り物として、アパートの一室を借りきってくれた。そればかりはその行為に甘える事にした。

以後、中学の一年と半年を少年はこのアパートで暮らし、これからもここで少年の日常は送られる。はずだった。

先月受けた高校受験。

家から近場を選び、幸いにもそこは少年の学力で十二分受かるレベルのところだった。

当日の筆記試験も面接も難なく終え、見事合格。さて明後日には登校初日を控えていたわけなのだが。

今朝その紙はポストに届けられた。

『合格取り消し通知』

封筒の宛名を確認する。見覚えがある。なにせ明後日から通うはずだった高校の名だ。

そうして改めて紙を読み上げる。

どうでもいい前口上はすっ飛ばし、要点が書かれている部分にはこう書いてある。

『合格取り消し通知』

はたして、こんな通知が存在するのだろうか？

そもそも制服まで買わせて、さあ明後日から登校といつこんな日に突然送られてくる代物であろうか。

その疑問に誰が答えてくれるはずもなく、少年は眉間に指をあてながらもう一通の封筒を開いた。

そしてまた、彼は固まる事となる。

『あまがみ
天神 楓殿。』

この度はIS学園ご入学おめでとつございます』

まったく見覚えのない所からの合格通知だった。

入学おめでとうございます（後書き）

どもどもこんにちわ。

タイピングを鍛えるのを目的に書き始めて、しかし最近を書く事が目的となりつつある黒羊です。

>突然の公開と思われるかもしれませんが、そろそろ緋弾が書き終わってしまうので、こちらはその次作といった感じで受け止めてください。

ちなみにこの作品、とある別サイトで一度完結させてる作品なのでもしかしたら見覚えがある方もいたりしますかね？

だとしたらありがとうございます。

ちなみにストーリーに対する加筆はないので、見覚えがあった方は読まずとも問題なしなんであしからず。

それでは、初めての人もそうでない人も宜しくお願いします。

クラスメートとご対面

IS学園。それはインフィニット・ストラトス、通称ISと呼ばれる世界最強の兵器に関わる人材を教育する為、日本に設置された特殊国立高等学校である。

どれほど特殊かという点、この学園の土地は日本を含むあらゆる国家機関に属さず、いかなる国家、組織の干渉も許さない国家規約

アラスカ条約 に基づき設立されたほどだ。

敷地内には、生徒たちが二人一部屋で暮らす学生寮、食堂、大浴場、訓練用アリーナといったもはや学校と呼ぶには難しいほどの施設が並び立つ。

それほどにISという兵器は世界の常識を打ち砕く兵器だった。

そしてなにを隠そう、このISの第一人者こそ楓の育ての親、篠ノ之 束だった。

とにかく学校というには広大に過ぎる敷地を前に、もう何十分とさまよっている楓は、そろそろ元気がなくなってきた声で改めて言う。

「広すぎだっつのバカヤロー……」

どうにかさまよっているうちに親切な用務員を見つけて事情を説明。ようやく割り当てられた教室の前まで辿り着くと、なにやらおっかない顔をした美人が教室前で待っていた。

「初日から遅刻とはいい度胸だ」

鋭いつり目に、黒のスーツが似合う大人の女性。楓も身長は百八十センチと大きいのが、彼女も女性のわりにモデルのように背が高い。

楓を睥睨する女性。

もしかしなくても怒っていた。

「さっそく説教でもしてやりたいが入学初日で時間が無い。運が良かったな」

ほっ、と息をつく楓に対して女性は不満そうに鼻を鳴らした。

「私の名は織斑おりむら 千冬ちふゆだ。お前のクラスの担任となる」

織斑 千冬。その名前はとても有名なものだった。

世界的に有名なIS操縦者。世界最強の女。

思いつくものは人それぞれかもしれないが、楓が真っ先に思い出し

たのは世間一般とはやや外れたものだった。

「ああ……、あんたが『ちーちゃん』か」

「何？」

「あ、やべ」

眉をひそめる千冬に、楓は慌てて口を閉じる。

『では入ってきてください』

タイミングが良いか悪いかはさておいて、扉を挟んだ向こうから幼
そうな女性の声が聞こえてくる。

「うーす」

「待て貴様」

これ幸いと声に応じて扉を開ける楓。後ろから千冬が呼び止めてい
たが聞こえないふりをする。

教室に入りまず出迎えてくれたのは、教室中からの熱視線。それと
教壇に立つ眼鏡をかけた女性の、やたら張り切った声だった。

「では自己紹介してください！」

立ち位置と仕切る素振り、そしてこの学園内で制服姿でないという事は、状況から推理して彼女はつまり千冬と同じ教師ということだ。千冬は担任といていたから彼女は副担任か。しかしまあ、信じられなかった。

やる気に満ち溢れた瞳の強い光はいいとして、全体的におっとりとした印象で童顔だ。半端じゃない童顔。これなら生徒が教師ごっこしていると言われた方が納得してしまう。

それを否定する材料は、抗えない引力をもつ彼女の胸元、

「どうしましたか？」

いつまでも自己紹介を始めない楓に心配そうに覗き込む童顔の女性。身をかがめると余計に目につくのだが、黙っていた方が賢明か。

「いや別に」一息挟んで、生徒たちに体の向きを合わせる」ども、
天神 楓ツス。宜しく」

暫しの沈黙。

「「よろしくー!」「」

やたら黄色い声ばかりのご挨拶。

それはそつだ。なんていったってISを動かす事ができるのは女性
だけのだから。

呼び出しは噂のあの人から

ISというのは略称で、正式名称をインフィニット・ストラトス。

元々は宇宙空間での活動を想定し開発された特殊スーツだったのだが、『白騎士事件』を境にその認識は大きく変わる。

認識だけではない。世界の価値観……いやありようを変えてしまった。

『白騎士事件』とは、IS発表から一か月後に起こったテロ事件だ。日本を狙って各国から計二千三百四十一発のミサイルが同時発射された。無論それは彼らの意志ではなく、何者かによって基地がハッキングされたのだった。

しかし、そのミサイルの半数以上をたった一機のISが撃ち落した。そのISこそが白騎士。

だが当然、その性能を目の当たりにした諸外国が黙っていられるはずもない。

脅威とみて破壊するもの、その技術を得ようと鹵獲するもの、彼らを送り込んできた軍事兵器の大半を白騎士はこれまた一機で撃破してしまう。

圧倒的性能は各国の興味を軒並みひいた。

事件後、ISは本来の用途である宇宙進出よりも、飛行、そしてパワード・スーツとしての軍事転用が競い合うように始まったわけだ。

ちなみに、この事件のきっかけとなったハッキングの犯人も、白騎士の操縦者も未だ不明である。

さて、当然各国はISを作り始めるのだがいかんせん上手くはいかなかった。

なにせISのほとんどは製作者を含め謎に包まれていた。

特に心臓部であるコアに至っては、当時より技術が発達した現在でも、製作者の束以外、製造はおろか解析すらまともにできていない。

結果、束が世界から消息を絶つまでに残した四百六十七機がISの絶対数となる。

それとどういった理屈かはコアと同じくらいわかっていないが、このISは女性にしか反応しなかった。

よって、自然な流れとして世界は女尊男卑が当たり前となってしまう。

ただ例外を除いて。

学生時代ではかなりの人気を誇る窓際の一番後ろの席。そこを苦もせずしてゲットした。遅刻して席がなかっただけ。楓

は、机に肩肘をつけてぼんやりと外を眺めていた。

といつても、別に青春漫画の主人公よろしく夢げに黄昏ているわけではなく、ただ現状からの逃避行動だった。

噂の男の子。

背が高いイケメン。

ピアスしてるけど不良？ ……でもワイルドでいいかも。

とかなんとか。以上、周囲の声。

こそこそと話しているようだが、まったくもって楓の耳にだだ漏れだった。

ISは女性にしか操縦できない以上、クラスメイトが女の子であることは覚悟していた。そこにポンと、男でISを操縦できるなどという人間が放り出されれば、彼女達の奇異の目にさらされる事も。ただ一つだけ楓は訂正してやりたい。

「不良じゃねえよ……」

ボソツ、と楓は青空へ訴えた。

「ちょっといいか？」

正面から声をかけられて、楓は気だるげに顔を正面に向けた。

そのものぐさな態度も彼女たちの印象に関わっていると知りつつも。

椅子に座っている楓は自然目に前の人物を見上げる形になる。
そしてふと妙なことに気が付いた。

真っ白な制服はこの学園の制服だ。周りの女子も、楓自身も着ている。

ただその違いは、下がスカートかズボンかというものだ。言うまでもないだろうが、楓はズボンをはいている。

生徒のほとんどが女の子である以上、むしろズボンタイプの制服は特注扱いだ。

さて話を戻し、楓が気が付いたのは目の前の人物は楓と同じズボンタイプの制服を着ているということだ。

改めて体つきを眺め、この人物がスカート嫌いの女の子でも、男装癖のある女子でもない、正真正銘の楓と同じ男であるのだと確信する。

そしてその顔は見覚えがある。

「あなたたしか……」

「一夏だ。織斑おりむら 一夏いちか」

ああ、と楓は納得する。

彼は織斑 一夏。この学園で楓と同じ異端な存在。

男でありながらISを起動させた人物だった。

「知ってる。あんた有名人だからな」

テレビでもやたらと話題にあがっていたのは彼だ。なんでもとある行き違いで偶然にもISに触れ起動させてしまったのだとか。いまや彼こそ時の人である。

対して、楓は彼ほどの知名度は無い。

その違いというのが、楓のことは入学式二日前に突然発覚したからだ。

それを受けた学園が急遽保護を名目に楓を緊急入学させたのだった。

おかげで大々的に注目された一夏とは違い、楓は注目が集まる前に学園の塀のなかに飛び込んだというわけだ。

今頃は『二人目』の呼び名で頻繁に話題に取り上げられているだろうが、入ってしまえば関係ない。

ちなみに、楓の情報のソースは不明らしい。

「オレって有名人なのか？」

首を傾げる一夏。どうやらかなりとぼけた男らしい。

「あんたが思っているよりわな。天神 楓だ。宜しくな、織斑」

手を差し出すと、一夏は嬉しそうに手を取った。

「ああ！ 一夏でいいぜ」

「んじゃこつちも楓でいい」

「おう。よろしくな、楓」

気持ちのいい奴だな、と楓は思った。
なんというか、キラキラしていて眩しい。

「なんだ。楓って怖そうな印象だったけど案外良い奴なんだな」

そしてはつきり言う奴だ。

「傷ついた」

「なんでだよ？ 褒めてるんだぜ」

「褒める前に貶してるけどな。……そんなに怖いかねえ」

最後だけボソリと呟く。

そういえば、中学時代も初対面の人間はあまり近付いてこなかった

気がする。

孤児院でもよく大人たちが『なにかあったの?』とか心配していたような……。

少し悲しくなってきたので楓は思い出すのをやめた。

「ちょっといいか?」

他愛ない話に入ってきたのは、今度こそ正真正銘の女の子だった。

長い黒髪をポニーテールにした女の子は、一夏へと向いていた。

「篝?」

少女を見るなり一夏は彼女の名らしきことを口にした。
どうやら二人は知り合いらしい。

女の子の方がチラチラと楓を見ている。

それに気付いた楓は一夏の背を叩く。

「行ってやれ」

「……………」

「おっ?」

女の子は一度楓を見ると堅苦しく頭を下げる。

「じゃああとでな、楓」

箒と呼ばれた少女の後を追う一夏。それを目で追う途中で、楓は自分にも迎えがきていることに気が付いた。

「天神 楓、ちょっとこい」

教室の扉を開いて立っているのは千冬だった。

楓の記憶にある限り常に不機嫌そうな彼女はやはり今も厳しい顔つきだ。

あまり楽しそうな誘いには思えない。

先導する千冬に黙ってついていく楓。千冬は建物の中から出ると、そのまま学校らしからぬ面積の敷地を横断して、やがて大きな池の前まで来てようやく歩みを止めた。
楓も止まる。

「貴様は束を知っているのか？」

振り返るなり直球な質問。それも有無を言わせる気のない不可視の圧力が重く楓にのしかかった。

「あいつはいまどこにいる？」

まるで質問というより尋問だ。

「さあ？ それは世界中が知りたがってるだろうけど」

「まともに答える気はないということか？」

僅かに目を細める千冬。圧力は倍以上になった。

「まさか。俺は知らないし、別に興味もない」

事実であり本心だった。

世界は篠ノ之 束を欲している。正確には彼女の知識を欲している。世界最強の兵器IS。その核であるコアを世界でただ一人造りだすことができる人物。

兵装開発の技術争いは必要だとしても、そも絶対数を増やせるとなると世界中が彼女を追い求めるのは自然の流れだといえた。

だが当然、世界がそんなことを考えることなど世界最高の頭脳をもつ彼女が考えないわけがない。

故にISが世界に発表されてすぐに彼女は行方をくらませた。

そうして現在でも、世界中が彼女を捜索しているのにもかかわらず彼女は見つかっていない。

そういう人間だ。

楓は本当に束の居場所は知らない。彼が独り立ちして以降、一切顔を合わせていないのだ。

だが心配もしていない。

たとえ世界が相手であっても、彼女が誰ぞに出し抜かれるなんて夢でも起こりえない。

彼女を見つけられるのは、おそらく彼女だけだ。

「なら質問を変えよう」

小さく吐息を漏らす千冬。幾分か圧力も和らいだ。

「貴様はいいつとどういう関係だ？」

「育ての親、かな。いや……、親ってよりは鼻肩目に見て姉か」

普段の彼女の姿を思い出せば、あれを親だと胸張って言ってやる気にはならなかった。

楓は近くのベンチに腰掛ける。

「あんたの話も聞いてるよ。というか、あいつが話すのは『ちーちやん』か『いっくん』か『篝ちゃん』だったから」

束という人間は一言で表してわがままな子供だ。

興味があることには睡眠も食事も忘れて鬼神の如く没頭する。しかし興味がないことには、たとえ何度言っただけでも聞かせても覚えようとしなかった。

以前一度だけ、楓は彼女の両親について尋ねたことがある。結果は、ぎりぎり名前を憶えている程度だった。

「『いっくん』っていうのがあんたの弟の一夏。『篝ちゃん』ってのが束の妹」

多分、さっきのポニーテールの子だ。

顔立ちがなんとなく束に似ていたように思う。

「で、『ちーちゃん』っていうのがあんたでしょう？ ブリュンヒルデと呼ばれた元日本代表」

「その名で呼ぶな」

より一層千冬の不機嫌さが増した。

「私のことはどうでもいい。貴様と東の関係は？」

「孤児だった俺を束が拾ってくれたんだ。それで少しの間一緒に暮らしてた」

『孤児』というワードに一瞬千冬が反応したのがわかった。

「本当か？ 本当に居場所は知らんのか」

「疑い深いねえ。俺が中二のとき別れてから一度も会ってない。ま、いまもどこかで『あはははははー』とか笑ってんじゃないか？ あんたこそ、友達だったってんなら居場所ぐらい知らないの？」

「知らん」

ばっさり。

どうやら楓からの質問にまともに答えるつもりはないらしい。かといって嘘をつける性格ではなさそうなので、居場所は本当に知らないのだろうが。

「手間をとらせたな」

用が済んだ千冬は楓に背を向ける。
しかしふと、教室に戻ろうとする足を止めた。

「二つ忠告してやろう」そう言うと、千冬は顔だけこちらに向ける
「私のことはキチンと『織斑先生』と呼べ。それと、年上には敬語
を使え」

彼女の瞳は、背筋が寒くなる迫力を秘めていた。

楓はひきつった笑みを返す。

「了解。織斑先生」

ふむ、と満足そうに千冬は頷く。

「いまのは私から呼び出したプライベートのものとして見逃してやる。しかし以後は容赦なく罰をくれてやるから覚悟しろ」

言い終えて歩みを再開させる千冬。

その背中を見送って、プレッシャーから解放された楓はずるずると
ベンチの背もたれに身を預ける。

「……予想以上に美人だったな、千冬さん」

代表決定決定戦

授業が本格的に開始される。スタート直後の『いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ。私の言葉には黙って返事をしろ』などという軍人であつても理不尽さに真つ青な千冬の発言に、クラスの女子はタフにも熱狂。楓はこのクラスでやっていけるか一人不安に思っていた。

山田 眼鏡をかけた童顔教師。本名山田^{やまだ} 真耶^{まや} の比較的わかりやすい授業のなか、一夏の『何一つわからない』発言でひとまず終了の鐘がなった。

「生きてっか？」

「あ〜う〜」

机に突つ伏した一夏は目に見えて生気が抜け落ちている。理解の追いつかない授業にくわえて、千冬の出席簿アタックによる頭部強打で彼の頭はオーバーヒートしていた。もぞもぞと動いた一夏が涼しい顔をしている楓を見る。

「楓は内容わかるのか？」

仲間を求めるような眼差しだったが、楓は頬をかきつつ、

「まあな」

ズコー、と仲間を失った一夏は再び机に顔をうずめる。これでも楓は数年間、ISの生みの親と生活していたのだ。大抵の知識は嫌でも頭に入ってくる。それになにより、彼と一夏ではそもそもとして

「ちよつとよろしくて？」

覚えのあるシチエーションで声がかかる。ただし声をかけてきたのは篝ではなかった。金髪碧眼の白人の少女。

IS学園はその特性上、日本だけではなく世界各国から生徒が集まってくる。彼女のような外国人も特に珍しくない。

「ちよつと聞いてますの？」

反応がない事にむむ、つと眉をつりあげる少女。楓はてっきりまた一夏の知り合いなのかと思って黙っていたのだが、どうやら違うらしい。

「んあ？ 何か用か」

ようやく復活した一夏がおざなりに応対する。それに対して少女はおおげさに一歩身を引く。

「んまあ！　なんて返事の仕方なんですの！？　わたくしに話しかけられたのですから、それ相応の態度というものがあるのではなくて？」

楓にはさっぱり用件がつかめない少女だった。ただ面倒そうな匂いがプンプンする。すでに彼女との関わりを避けようとする楓と対照的に、一夏は鈍いのかあっさりとその空気をかき乱す。

「いや、だってオレお前のこと知らないぞ。楓は知ってるか？」

「そこで俺を巻き込むなよ。……いや知らねえけどさ」

逃走の選択肢を潰されてしまった楓は泣く泣くその場にとどまる。しかしこういった言い方をしてしまえば反応は予想できる。見れば案の定、金髪少女の顔は赤い怒り色に染まっていた。

「知らない？　イギリス代表候補生にして入試主席であるこのわたくしセシリア・オルコットを知らないとおっしゃいますの！？」

セシリアは縦ロールの金髪を振り乱す。おそらく自己紹介のときに

も同じようなことを言ったのであろうが、遅刻したためその場になかった楓が知るはずもないことだった。楓と違い、彼女の自己紹介を聞いているであろう一夏は、

「あの、質問いいか？」

「フン。よろしくてよ。下々の要求に応えるのも貴族の役目」

金髪ロールを手ではじくセシリア。しかし楓は良い予感がしなかった。

「代表候補生って、なんだ？」

凍りつくセシリア。聞き耳をたてていたクラスメイトたちもおもわずすっ転ぶ。わかっていないのは終始真面目な顔をした一夏本人だけ。

「期待しちやいなかったがお前さんそれほどか」

「あ、貴方本気で言ってますの!？」

「おう」

まったく不憫でならないセシリアだった。

「代表候補生つてのは、名前のまんま国家代表のIS操縦者
その候補生だ。候補つつつても待遇は他の連中とはまるで違
う。なにせ国が全面的にバックアップするからな」

「そう！ つまりエリートなのですよ！」

仕方なしに楓が説明する。するとめげないセシリアはくびれた腰に
手をあてて、絵に描いたお嬢様笑いを高らかに響かせる。なかな
か心が強い。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とクラスを共にすること
も名誉なこと。もう少しその幸運を理解してくださる？」

だがその意味を一夏がしつかり理解できているかというのと、否だ。

「そりゃあラッキーだな」

「……バカにしていますの？」

どうやらこの二人、とことん相性が悪いらしい。天然と高飛車は混
ぜ合わせると危険だ。

「フン。まあ、ですが、わたくし優秀ですので貴方たちのような人間にも優しくしてあげますわよ」

もはや一夏相手に威張り散らしても意味はないと気付いていながら、まだ高圧的友好的態度は崩さない。というか、自分まで巻き込まれていることに楓は抗議したかった。

「なにかわからないことがあれば……まあ、泣いて頼まれれば教えて差し上げてもよくなってよ。なにせわたくし、入試試験で唯一教官を倒したエリートですから！」

縦ロールをはじいて気分よく喋っていたセシリアだったが、いまの話に『ん？』と一夏が反応を示した。

「入試ってあれか？ ISを動かして戦うやつ」

「それ以外ないでしょ」

「あれならオレも倒したぞ？」

「んなつ！？」今度こそ本当に驚いたセシリア「わ、わたくしだけと聞きましたわ」

「女子だけっておちじゃないか？」

ピッキーン、とセシリアが固まった音が聞こえてくるようだった。ちなみに、楓はそんな試験は受けていない。なにせ最初に送られてきたのが『合格通知』だったのだから当然だ。

「あ、貴方たちも教官を倒したというんですの!？」

最初よりかなり余裕がはぎ取られてしまった彼女は見ていてとても不憫だ。

「え、えーと……多分」

「いや俺は別に倒しちゃ

」

「多分ってなんですか!？ はっきりしなさいな!」

「聞けよ。つか、落ち着けよ嬢ちゃん」

「これが落ち着いて

」

そこで幸運にもチャイムが鳴る。セシリアは忌々しそうにスピーカーを睨みつけ、そのまま楓たちを睨んだ。

「また後できますわ」

そう言つて鼻息荒く席に帰っていく。結局最後まで彼女がなにに怒っているのかもわからない。夏は首をひねっていた。それを見て、楓は肩を落とす。

次の授業、教壇に立っているのは山田ではなく千冬だった。彼女は授業を始める前に思い出したように口にする。

「再来週にあるクラス対抗戦の代表を決めねばならんな」

クラス代表戦とは、クラス代表者同士で行われるリーグ戦。無論、ISを使った戦闘だ。それにクラス代表は、今回のリーグ戦だけでなく生徒会の会議や委員会への出席など、要するにクラス委員の役割を押し付けられることとなる。

「ちなみにこのリーグ戦は入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。いまの時点では大した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まれば一年間は変更できないからそのつもりでいろ」

そう締めくくった後、一人の女子が手をあげる。

「はい！ 織斑君を推薦します」

「うえっ!？」

突然自分の名前がでてきたことに驚いた一夏だったが、推薦した彼女に呼応するように他からも『賛成』声パラパラとあがる。

「他にいないか。自他推薦問わんぞ」

楓はいくつかの視線が自分に向けられていることに気付いていながら無視した。いまだ不良系のイメージがある楓に、少しばかり勇気がないのか推薦の声はあがらない。大変不本意ではあるが、それで構わない。このまま一夏に決まってしまうと楓は薄情にも願う。

「納得いきませんわ!」

セシリアが席を勢いよく立つ。

「このような選出認められません。男がクラス代表などと……、わたくしに一年間生き恥を晒せとおっしゃるの!? そもそも、実力でいけばわたくしが選ばれるのが必然。それを物珍しいというだけ

で

「酷い言われようだな」

「当然ですわ」

自信過剰ではあるが、彼女の言葉も最もであった。国の代表である以上、彼女にもプライドというものがある。

「大体」彼女は鼻で笑い「文化としても後進的なこんな島国で暮さねばならないことだけでも耐え難いですのに」

しかしその発言には一夏もカチンときたのか、彼女と張り合うように立ち上がった。

「イギリスだって大したお国自慢なんかないだろ。世界一不味い料理で何年覇者だよ」

「貴方、わたくしの祖国を侮辱しますの!？」

わなわなと肩を震わせるセシリアは、ビシッと一夏を指さす。

「代表をかけて決闘ですわ」

こうまで言われては黙っていられないと、一夏も応じる。クラス代表をかけたISによる決闘。とりあえずこれで決まりかと思いきや、千冬はわざとらしく言葉を付け加える。

「いまなら一票でも入った者も決闘に参加させよう。他にいないか？」

「「天神君を推薦します」」

ゴツン、と楓は机に突っ伏した。

「……………畜生。千冬さんめ」

相部屋と掃除

入学早々、厄介事がフルコースでもてなされた楓は周りの目をはばかりもせず大きく肩を落とす。

「どうした？　なんか元気ないな、楓」

「……お前さんのお気楽な頭が羨ましい」

「？」

同じ立場、いや楓以上に面倒な立ち位置にいるはずの一夏はとぼけた顔で無邪気に首を傾げている。それが羨ましいとは思っても、憧れることは多分一生……というか絶対ない。

「一夏！」

その呼び声に二人で振り返ると、廊下をドシドシと歩いてくるサムライポニーテールの少女。彼女は一夏と一緒に楓がいることに気付くと僅かに態度を改める。

「おお、篝ほ！　そういや、楓には紹介してなかったよな？　篠ノ之せいの篝ほ。オレの幼馴染だ」

「……篠ノ之 箒だ。よろしく頼む」

一夏の『幼馴染』というワードに一瞬眉をひそめた彼女だったが、すぐに元の厳格そうな顔つきに引き締めると楓に向き合う。

一方で、楓は箒をじっくりと観察する。彼女が束の妹。どこことなく面影がある。

「天神 楓だ。よろしく、篠ノ之さん」

「同級生なのだ、さんはいらない。それに苗字で呼ぶのもやめてくれ。その……苦手、なんだ」

箒の顔に影が差す。それも仕方のないことなのかもしれない。束の家族であるなら、彼女の存在が原因で嫌な思い出のひとつやふたつあるのも当然だ。少なくとも行動の制限や監視は義務付けられていただろうし。

ふと楓は考える。彼女は、箒は束を恨んでいるのだろうか？

「そっか。じゃあよろしく、箒」

「ああ」

ひっぱりだした穏やかな笑顔の楓。箒もまた、初めて笑顔を見せる。

その笑顔はたしかに束を感じた。やはり彼女は束の姉妹なのだとも認識する。

「一夏！」思い出したようにクルリと体の向きを入れ替えた箒は吠える。「放課後、剣の訓練をしようと行ってあっただろう！」

「あ……」

完全に忘れていたという顔の一夏。うがー、と歯を剥き出して怒る箒の様子は先ほどまでのイメージとは正反対の無邪気さがある。しかしとても自然体で……たったそれだけで、楓は彼女にとって一夏がどういった存在なのかを察する。

「訓練か」

思わず言葉を繰り返す楓。

「そつだ！ 楓もくるか？」

「いや、遠慮しとく」

隣りで複雑な表情をしている箒の為にも、とは意地悪になるので言わない。

「剣よりも俺は自分のISを慣らしておくさ」

なにせ決闘は一週間後。いまは体を鍛え技術を学ぶよりも、久方ぶりのISに体を慣らしておく必要性を楓は感じていた。そう、何気ない一言だったのだが、一夏も筭も随分と驚いた様子だった。

「楓、自分のIS持つてるのか!？」

「あれ……言ってなかったっけ？ 持つてるぞ」

そういつて楓は自分の左耳に見せる。リング形状の三連ピアス。この黒いリングこそ、楓のISの待機状態。

「ま、そーゆーことだから二人で仲良くやりな」

「そっか。わかった」

「ほら行くぞ、一夏」

あからさまに嬉しそうな筭。あんな彼女の姿を見ているのに、彼女の気持ちに欠片も気付いている様子のない一夏は相当な鈍チンだ。そんな二人の背を見送りながら、楓はそっと己のISであるピアスを撫でる。

専用機持ち、とはその呼び名通りに最強の兵器であるISを個人で所有する者達のことを指す。ISは、開発者の束の意向なのか現存する個体以上に製造されることはない。兵装や部分的なパーツはともかく、ISのコアは彼女以外作ることができないからだ。

現存するコアの数は全部で四六七機。つまりそれが、この世界におけるISの絶対数である。どの国もただでさえ少ないコアを無作為に配ってしまおうとは思わない。データを取るにしても国家戦力にするも、才能のある人間を選定し、特定個人に預けて専用機体とした調整した方が遥かに開発しやすいのだ。

だからこそ、才能を見出された専用機持ちの代表候補生たちには、国からのサポートが惜しみなくふるわれる。

だが実は、楓のISはこの四六七機の内におそらく含まれていないというのも、彼がこのISを手に入れたのは束からのプレゼントで、ずっと昔に貰ったものだったから。いま思い返してみるととんでもない。それこそ子供にミニカーでもあげるような気軽さで、彼女はこれを楓に渡してきたのだった。

つまり、世間は楓のことをISを操る『二番目の男』と認識しているが、それは正しくない。楓はずっと昔からこのISを操っていた。

IS学園から身に覚えのない合格通知が届けられたとき、楓が文句をたれながらもその申し出を受けた理由も実はここにある。たしかに受験した覚えはない。だが、呼ばれる理由には心当たりがあった。

楓がISを操れることを知っているのはただ一人。ならばそんな自分に学園へ呼び出しがかかったなら、それは束の意志ということだ。そして彼女の意志ならば、楓には断る理由がない。

「やっぱ久しぶりだと勘が鈍るな」

凝った肩をぐるぐる回しながら楓は一人寮への道を歩いていた。

「こりゃ完全に勘を取り戻すまでどれだけかかるやら

ん？」

楓は寮の入り口前に見覚えある姿を発見する。漆黒のスーツに身を包んだ女性。千冬だ。腕を組んで壁に背を預けて、まるで石像のようになり微動だにしない彼女は、どうやら誰かを待っているようだった。気配を察したのか、固く閉じられていた瞼が開かれる。

「天神、ついてこい」

「へ？」

組んでいた腕を解いて歩き出してしまふ千冬。相変わらず有無をいわせない調子に、戸惑いながらも楓は従う。

IS学園の生徒は皆二人一組で寮生活をおくる。無論、楓もそのつもりだった。

「こりゃ一体どういうこと？」

「見ての通りだ」

黙ってついてきた結果つれてこられたのはたしかに部屋だった。だが、この部屋にはすでに誰かの生活あとがうかがえる。ドカドカと部屋に入っていく千冬は、手に持っていた荷物を適当にベットに放り投げ、扉の前で停止している楓に振り返る。

「どうした？」

要するに千冬の部屋だった。とりあえず、いつまでも入り口で突っ立っているわけにもいかないので、後ろ手に扉を閉める。

「俺はてっきり一夏と同じ部屋かと思ってたんすけど」

「そのつもりだったがまだ手続きが済まんだ。特に、貴様に関しては急な入学だったからな。ただでさえここは手続きするものが増えたりと多い。それに加え、今度やってくる一夏のISの登録手続きも増えた。山田先生も嘆いていたな」

ふう、とため息をこぼす。

「手続き手続きって……面倒っすね」

「否定はせん」千冬はスーツに手をかけながら「が、ここは各国の人間が入りするうえ、世界でもっともデリケートな場所とっていい。疎かにはできないのさ」

言いながら脱いだ服をポンポンとベットに放り投げていく。さきほどのカバンがもう見えない。

「にしても……」

楓は部屋を見渡す。いま脱ぎ捨てた服だけでなく、昨日の分だろうか洗濯かごに溜まった衣類の山。乱れたベット。広げっぱなしの書類。

「容姿端麗、質実剛健。ブリュンヒルデと誰もが憧れ敬う天下の織斑 千冬が、実はこんなズボラな性格してるだなんて知られたら世界が泣きますよ?」

「余計なお世話だ」

顔面目掛けて投げられた空き缶（ビール缶）をキャッチする。

「まずは掃除か」

缶を握り潰して、楓は呟く。

掃除は一時間強で終えた。随分と手慣れていたのは、元々一緒に住んでいた束はしょっちゅう部屋を散らかすので楓はわりとまめに片づけさせられていたのだ。洗い終えた洗濯物を乾燥機にぶち込んだところで、ひとまず戦いは終わった。

「ほー、大したものだ」

まるで他人事のような千冬の感想。ちなみに、一切片づけに手をださなかった彼女は呑気に風呂を堪能していた。いまの格好は、ノースリーブのシャツにふとももが露わになっているショートパンツ。普段のクールビューティーなスーツ姿とは真逆の、ラフ＆ラフな格好だった。

「お茶飲むけどいりますか？」

「いや、ビールをくれ」

仕事終わりの一杯というやつだろうか。開けてみると冷蔵庫にはバ

ツチリとビールが貯蔵されていた。

「貴様は飲むなよ」

「ケチくさい。一杯ぐらい」

「命とどちらが大切だ？」

「さてお湯沸いたかな、つと」

ただならぬ殺気を感じたので楓は渋々自分用に茶を注ぐ。千冬にはビールを投げ渡した。プシュ。ゴクゴク。ぷはー！ と典型的なO Lのような千冬を見て、楓は彼女も普通の女性なのだと改めて知る。ズズツ、と隣りで楓も茶を啜る。

「ISSの調子はどうだ？」

「……………見てたんすか？」

楓はまだ千冬に自分が専用機持ちだと言った覚えはない。

「なんだ。本当に持ってるのか」

彼女はそう言って、しかし興味は薄そうにビールを呷る。どつやらかまをかけられたらしい。

「千冬さんて」

「織斑先生、だ」

「いまはプライベートでしょ。そっちだってビール飲んでんだし」

千冬は舌をうった。

「それでも私の方が年上だ。敬え」

「へいへい。千冬さんて、案外普通なんすね」

なんとなしに湯呑を見下ろす。

「ブリュンヒルデなんてたいそうな名前で呼ばれて、束から色々と話聞いて、モンド・グロツソ優勝のときなんて……女神だ戦姫だいわれれば信じちまうよ」

「幻滅したか？ 現実はこちらで」

意地悪く笑いながら問いかけてくる千冬に、楓は首を振って湯呑を

傾ける。

「別に。むしろ普通で、年相応の女の人でほっとしたかな」

千冬は虚をつかれたのが、珍しく呆けた顔を見せ、フンと鼻を鳴らして酒を呷る。が、もう空だったらしい。

「天神、もう一本取れ」

「はいはい、女王様」

「そこまで偉くはない」

ポカン、と後頭部に空き缶をあてられた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2805ba/>

IS（インフィニット・ストラトス） 舞い踊る鴉

2012年1月15日01時48分発行